

令和6年度 第2回総合教育会議 議事録

日時 令和6年11月21日（木）午後6時～

場所 いわき産業創造館セミナー室A+B

第2回総合教育会議 議事録

- 1 日 時 令和6年11月21日（木） 午後6時～午後7時50分
- 2 場 所 いわき産業創造館 セミナー室A+B
- 3 出席者 いわき市長 内田 広之
いわき市教育長 服部 樹理
いわき市教育委員会 委員 根本 紀太郎
いわき市教育委員会 委員 宮澤 美智子
いわき市教育委員会 委員 小峰 美保子
いわき市教育委員会 委員 阿部 武彦
- 4 内 容 いわき市における英語力向上について
(ゲストスピーカー) 前さいたま市教育長 細田 眞由美氏

【会議内容】

1 開会

2 議事

会議設置要綱第4条の規定により、市長が議長となること、また、同要綱第7条第2項の規定による第2回会議の議事録への署名は、根本委員及び宮澤委員が行うことを確認した。

(1) いわき市における英語力向上について

① 事務局説明（学校教育課 鈴木課長）

- ・ 英語教育状況実施調査における推移を見ると、CEFR A1レベル相当以上の英語力を有していると思われる割合、CEFR A1相当以上取得している割合は、全国の割合と比較しても、本市は低くなっているということがわかる。
- ・ また、CEFR A1相当以上を取得している割合が、本市においても減少傾向にあることから、注視していかなければならないと考えている。
- ・ 全国学力学習状況調査における平均正答率は、まず、国語と数学においては、少しずつ全国との差が縮まってきているが、全国には届いてない現状である。
- ・ 英語においては、4年に1回実施となるが、全国との差が開いている状況である。

- ・ 本市の英語教育の取り組みについて、5つ説明する。
 - ・ まず一つ目は、A L Tの配置の工夫についてである。
 - ・ これまで、一人のA L Tが小学校を担当する場合は小学校のみ、中学校を担当する場合は中学校のみに訪問していたが、今年度から同じ中学校区に同じA L Tを配置した。
 - ・ このことにより、基幹となる中学校のほかに、同じ学区の小学校に訪問することができ、小中学校の連携を図ることによって小学生が安心して中学校の英語教育を受けることができる「中1ギャップ」の解消を図る目的で実施している。
 - ・ 二つ目は、英語教育サポーター派遣についてである。
 - ・ 地域と連携を図りながら、英語が堪能な地域人材を希望のある小学校に派遣し、外国語活動や外国語科の授業の補助を行っている。
 - ・ 三つ目は、イングリッシュ・イマージョン・キャンプについてである。
 - ・ 英語を通し、A L Tの出身国の文化に触れて学ぶが、オールイングリッシュで取り組んでいる。
 - ・ このため、我々関係者もその場に入れば日本語禁止という、なかなか切ない思いをするが、子どもたちは、すぐに慣れて、本当にいい活動ができていると感じた。
 - ・ 四つ目は、英語4技能検定G T E Cの実施についてである。
 - ・ 現在、研究指定校が5校となっており、中学校区での小中連携を目的に実施しているが、実施結果を基に、授業における指導内容や指導方法の改善に活かす取り組みをしている。
 - ・ 最後五つ目は、英語弁論大会についてである。
 - ・ これは全国的に行われていると思うが、本市においても実施しており、今年度は、参加校34校、参加生徒数46名となっている。
 - ・ このように英語教育に取り組んでいるところではあるが、英語を使う機会の圧倒的な少なさ、学ぶ動機付けの弱さに課題があり、今後取り組んでいく必要があると感じているところである。
-
- ・ 次に、本市の学力向上の取り組みについて3つ説明する。
 - ・ まず一つ目、学校カルテ（学校・学級ダッシュボード）についてである。
 - ・ 全国学力学習状況調査、ふくしま学力調査、本市独自に行っている質問調査の三つの調査結果から、その相関関係を複合的にデータ分析し、各学校・学級の強みや課題を明確にし、見える化したものである。
 - ・ 授業づくりにおける目標を設定することを主に目的とし、3年前から、学校教育課に学力向上チームを設置している。

- ・ 4名の学力向上アドバイザーが学校に訪問のうえ、管理職と面談し、ダッシュボードの活用の仕方をアドバイスしながら、学校・学級経営、授業改善や授業づくりに活かす取り組みをしているところである。
 - ・ 二つ目は、いわきの学びづくりについてである。
 - ・ いわきの学びづくりは「授業づくり支援」と「実践事例発掘」を行っている。
 - ・ まず、授業づくり支援については、学校からの依頼に応じ、学校と市教育委員会が協働的に授業づくりをする仕組みを整えた。
 - ・ こちらは、11月からスタートし、現在、小学校2校で実践しているところで、「本校も依頼したい」という校長先生がいることから、教育委員会としてもぜひ授業づくりから支援していきたいと考えているところである。
 - ・ 次に、実践事例発掘については、本市においても先進的な取り組みや、主体的・対話的で深い学びを授業の中で実践している先生がいることから、その授業に教育委員会も参加するとともに他の学校や先生方にも紹介しながら展開していくもので、実際にこちらも2回訪問し参加している。
 - ・ 三つ目は、生成AIパイロット校の実践についてである。
 - ・ 今年度から内郷第一中学校が、リーディングDXスクールAIパイロット校の指定を受け、GIGA端末とクラウドの徹底活用に取り組んでいるところである。
 - ・ まず、生成AIの活用については、校務において、会議の要項や、掲示物に使用する背景・イラスト、テスト問題のたたき台やワークシートを作成するほか、挨拶文などの添削に活用している。
 - ・ 授業においては、英作文の添削やイラストの生成、練習問題の生成とフィードバックに活用している。
 - ・ 練習問題の生成とフィードバックについては、練習問題を回答すると、その回答を添削し、さらにアドバイスまでされるような仕組みになっている。
 - ・ こちらのスライドは、内郷第一中学校の宮崎美穂教諭が英語の授業で実践している様子で、生徒が自分で作成した英作文と生成AIによって作成された英作文を比較しながら、自分の考えを深めていく取り組みである。
 - ・ 次のスライドは、海外へ送るメッセージカードのイラストを、メッセージに必要な英語を用いてイラストをデザインし、カードを作成している様子である。
- (動画)
- ・ 子どもたちの視点で授業を展開しており、とても素晴らしいなと感じている。

- ・ 子どもたちの姿をもって授業が成立するということは、我々ももっと学んでいかなければならないと感じている。
- ・ 英語に触れる時間を増やすことを今後も尽力して参りたい。

② さいたま市の英語教育について（細田氏）

- ・ 気づけば教育公務員も 40 年を過ぎ、埼玉県 of 県立高校の英語の教員がスタートで、ご縁があり、さいたま市の教育長を 2 期 6 年間務めさせていただいた。
- ・ 現在は何をしているかとよくいろいろな方に聞かれるが、「フーテンの眞由」と自称しており、教育長を退任後に出版した「世界基準の英語力」を手にとってくださった方からお声がけいただき、日本中でこのようにお話をさせていただいているところである。
- ・ 実は、TBS テレビの朝の情報番組「THE TIME,」のプロデューサーから、さいたま市の英語力がすごいということを聞いたことから取材したいと電話があり、9 月 8 日に放送された様子をまずはご覧いただきたい。

（動画）

- ・ 恥ずかしながら、私はアメリカから帰った後、英検 1 級を取得するのに 8 回かかったが、さいたま市では、中学 2 年生で取得している生徒が珍しい状況ではないところまできている。
- ・ 私は 2017 年度にさいたま市の教育長に就任したが、その時点ですでに、英検 3 級以上のいわゆる C E F R A 1 以上が 58.9% で、2022 年度末までに 50% ということが閣議決定されていたことから、教育委員会では、安心している雰囲気であった。
- ・ しかし、私が各学校の授業を見る中で子どもたちの様子を見てみると、もっと話せるようになりたい、もっと勉強したいという食欲な気持ちが滲み出ていると感じたことから、指導主事など幹部集めて、「もっと高みに行く仕組みを作ろう」と言った。
- ・ さいたま市では、市立の学校に通っている児童・生徒は、168 校、10 万 5000 人いて、フルタイムの教員が 6300 人、非常勤まで含めると 7000 人となる。
- ・ このため、私は大きな組織を動かしていくときには、とにかく一にも二にも仕組みが大切と思っている。
- ・ その仕組みを本には「さいたまメソッド」と書いているが、国の特区制度を活用し、新しい英語教育「グローバルスタディ」を実施している。
- ・ グローバルスタディは、小学 1 年生から中学 3 年生までの 9 年間を一貫したカリキュラムで、「聞く」「話す」「読む」「書く」4 つの技能をバラ

スよく学ぶことで、将来、グローバル社会で主体的に行動し、たくましく生きる児童生徒を育成していこうとするものである。

- ・ 私は、「英語は世界を見る窓」と語り続けており、この多様性に溢れている世界を見る最大の武器だと思っている。
- ・ グローバルスタディは、私どものオリジナルの教科と考えていただければいいと思う。
- ・ 一つ目のさいたまメソッドは、自前主義をやめた先にある充実した指導体制についてである。
- ・ 教員は、どうしても使命感があるので、とにかく自分たちがやらなくてはならないという気持ちがあるが、まず私は、「自前主義をやめよう」と伝えた。
- ・ 餅は餅屋に任せるという考えになると、効果的で効率的なスキームになる。
- ・ その一つ目として、全ての小学校の教員にネイティブ研修を実施した。
- ・ 小学校の教職課程で英語の指導法に関する単位の取得が必要になったのは、2019年度からでそれ以前に小学校の教員になった場合は、まさか自分が英語を教えることになるとは思ってもいなかったと思う。
- ・ このことから、CEFR B1以上取得の小学校教員を除いた約2,000人を対象に、5年計画の悉皆研修を実施した。
- ・ 私が退任する前年度に最終の5年目で、4年目あたりからは抵抗感があった教員が多かったが、3泊4日で英語に塗れる研修に参加した後は、「楽しかった」と感想を述べていた。
- ・ この本にも書いたが、とりわけ英語は楽しくなくては続かないということが私のモットーである。
- ・ 教員自身が小学生の立場になって実際にプログラムを体験することによって、自分も子どもたちに面白い勉強・内容を提供しようという気持ちになる。
- ・ また、教員というのは、「勘・経験・根性」の3Kで授業を実施してしまうことから、その3Kから脱出するためにもエビデンスとデータに基づいた指導ができるようにした。
- ・ このために、GTECを中学2年生全員1万1200人も受けさせており、また、GTECよりも手ごろな価格の英検IBMについては、全中学生と小学6年生に受けさせている。
- ・ これらを導入した後が大切で、1人ずつにフィードバックできる結果、クラスの強みと課題が見られるデータ、学校全体が見られるデータ、そして、さいたま市全体が見られるデータが得られる。
- ・ 結果が出たら、必ず全体会を行い、さいたま市の英語力の強みや課題について、試験を作成した会社に徹底的に分析していただき、その後、学校

ごとの分析結果についても、10 個ほどのブースを作り、そこで聞くことを実施している。

- ・ 私は、高校の英語教員であったことから、高校では当たり前であった模試の結果を分析することで可視化することも、義務教育の中学校では今までなかった文化であった。
- ・ これこそが、学校の授業改革に資するための入口となり、そこから学校が自前主義をやめたエビデンスのデータに基づいた指導を自走するようになった。
- ・ また、私はアメリカに留学してアメリカの大学で勉強したりしてきたが、幼い時から英語耳をつくってきたわけではないので、英語にコンプレックスがある。
- ・ このため、ネイティブの持っているすごさを目の当たりにしてきたことから、大変ではあるが、豊富に英語ネイティブの教師を雇うことを実施してきた。
- ・ A L T の直接雇用が 148 人、事務局の直接雇用が 5 人、ネイティブ教員の採用が 12 人、J E T が 5 人となっている。
- ・ ネイティブ教員については、教員試験を実施したうえで採用していることから、担任も学年主任にもなることが可能で、本人が希望した場合は、管理職になることも可能である。
- ・ 全部合わせて 170 人の英語ネイティブの教師がさいたま市の英語を支えており、英語の授業で日本語を使っている授業はほとんどない。
- ・ 二つ目のさいたまメソッドは、属人化させないための指導体制の構築についてである。
- ・ 私は、属人化させないということが大切だと思っており、例えば、私が名物の英語教員だとした場合、その教員がその学校からいなくなったときに、ここをどうしたらよいかということになるため、私は属人化させないためのシステムとして、オリジナルの教材を開発した。
- ・ 小・中学校の 9 年間で「4・3・2 制」で捉えたカリキュラムで、発達段階による言語習得のメカニズムを踏まえ DVD を制作した。
- ・ 第 1 期の小学 1 年生から 4 年生までは、とにかく英語耳を作り、英語が楽しくて仕方ない、英語がコミュニケーションの手段ということを児童に伝えられるようなものになっている。
- ・ 第 2 期の小学 5 年生から中学 1 年生までは、文字に対して興味を持たせて、話し言葉だけではなく、書き言葉としてのコミュニケーションの手段としても定着させるようなものになっている。
- ・ 第 3 期の中学 2 年生から 3 年生までは、9 年間の仕上げとして、コミュニケーションを図るための 4 技能をバランスよく使えるように仕上げているものになっている。

- このようなオリジナルの教材を開発したが、誰がやってもいい授業ができるために、この教材に付随しティーチングプランやワークシートを全部添付した。
 - 教員たちが非常に忙しい毎日を過ごしていても、この添付されているティーチングプランとワークシートのデータも渡しており、自分用にカスタマイズしたい人はカスタマイズすればいいし、カスタマイズする時間もない場合は、そのまま使ってもいい授業ができるように開発した。
 - 小学校の低学年は、集中できる時間が短い発達段階であり、45 分の授業は飽きてしまうため、15 分のモジュールを作り、ストーリー仕立てのDVDを活用して実施している。
 - また、自分と近い設定に親和性を感じる時期であることから、DVDの登場人物は、日本語も英語も話せない宇宙人のNICOと、ALTの先生をイメージするANNAにして、先生と共同生活をするなかでだんだんと英語をマスターしていく内容にしている。
 - 言語間の距離を測るスケールがあり、アメリカ合衆国の外交官になる人たちが着任する国の言語をマスターするために、どのくらい時間がかかるかというデータがある。
 - 私は、これは言葉と言葉の間の距離を示すには非常に有意義なスケールだというふうに思うことから、説明する際によく使っているが、例えば、英語を母語としているアメリカ合衆国の外交官にとって、ドイツ語というのはほとんど親戚同士のような言語であることから距離が近いが、英語と日本語の距離は最も遠く、かけ離れた言語の一つとなっている。
 - アメリカ合衆国の外交官で非常に言語習得能力も高いという人たちでさえ、そのスケールでいうと、日本語をマスターするのに最低 2200 時間かかると言われている。
 - ただ、私がアカデミアの方々と議論するなかで、私たち日本人が英語を習得するためにはどのくらいかかるかということを意見集約すると、大体 4 倍ぐらいかかるだろうと感じており、8800 時間をかけなくては英語が自分のものにならないとすると忍耐が必要になる。
 - 忍耐がいるということは、まず、楽しくなくては駄目だと思っている。
-
- 三つ目のさいたまメソッドは、アウトプットの重要性を認識したさまざまな実践についてである。
 - 言葉は、インプットするだけでは身につくものではなく、インプットした後にアウトプットして使う、使っていくともっとインプットしたくなるというこのエコ循環が英語学習には大切だと思っている。
 - このスライドは、小学校の英語劇発表会の様子である。
 - これは、「桃太郎」をオリジナルの脚本で演じるが、演じる児童たちの向こう側に、保護者や地域の方々がオーディエンスで観覧しており、小学

生が英語で演じて、オーディエンスは、面白いところで笑い、時には涙を誘っている。

- ・ 演じている児童たちは、そのオーディエンスの姿を目の当たりにし、英語がコミュニケーションの手段であり、人を感動させることだと気づき、そして、もっと勉強したいというモチベーションが高まっている。
- ・ さいたま市においても、中学校のスピーチコンテストやディベートも実施しており、嬉しいことに、中学校と高校が全国優勝を6回している。
- ・ また、先ほどの動画でも出てきましたイングリッシュキャンプについては、小学校から高校までの異年齢とネイティブ、自然の体験という掛け合わせが非常に興味深くて、意義があると思っている。
- ・ 次のスライドは、模擬国連大会の様子である。
- ・ これについては、私は教員時代からずっと模擬国連を実施したいと思っており、さいたま市の教育長に就任して、みんなに声を掛けましたら、最初は、みんなやる気がなかったが、始めてみるとすごく面白いと実感するようになった。
- ・ 模擬国連を簡単に説明すると、参加生徒が各国の大使になり、様々な議題についてそれぞれの国の立場で意見をぶつけ合い、賛成や反対の投票を行う国連を擬似体験するものである。
- ・ まず、初日に、参加生徒4人ずつでグループを作り、どの国の大使となるかを決めるくじを引く。
- ・ 1回目のテーマは、「2050年の地球をどのようにして養うか」という食糧問題であった。
- ・ 模擬国連は3日間かけて実施し、最終日の3日目が本番で、その本番に向けてみんなで理論構築のためにリサーチを行う。
- ・ 当然のことながら、各国の大使という立場であることから、自国の国益や他国との関係などを考えなくてはならない。
- ・ いろいろな教室を使い2日かけてリサーチするのだが、その最中に私が各教室を回っていると、ロシアの大使になった生徒が私に話かけた。
「ロシアの大使だから、ロシアの国益を考えながら議論しなくてははいけない。ロシアのことをいろいろリサーチしていると、日本語で検索すると、日本語話者が日本語の論文や記事を書いているために日本語のバイアスがかかっているように感じる。このため、英語で検索してみたら、いろいろな言語の話者が英語で論文やレポートを書いたりしていて、英語のほうがバイアスはかかっていないと気が付いた。」
- ・ これを聞いて、私は鳥肌が立つくらいに嬉しくなり、そして、これが模擬国連の凄さだと思った。
- ・ このときは、現実の国際情勢もロシアがウクライナに軍事侵攻した年で非常に難しいものであったが、彼らは、先ほどの2050年の地球をどうや

って養うかという食糧問題を、それぞれの国益を考えながら、結論を導いていった。

- ・ 最後の模擬国連の本大会は英語で実施となるが、これこそ私がやりたかったことの本質だと思った。
 - ・ 次のスライドは、イノベーションプログラムの様子である。
 - ・ 私は、アントレプレナーシップを育てていくということもこれからはすごく大切だと思っており、海外フィールドワークをシリコンバレーで実施した。
 - ・ これは、単なる英語研修ではなく、出発する前に半年かけて、課題を解決するためのイノベティブなアイデアを仕上げ、そして、シリコンバレーに行き、アメリカの企業家や投資家たちにピッチを行うものである。
 - ・ 私は、アメリカの企業家や投資家たちが、高校生が一生懸命半年かけてきたものに対し、「みんなすごい」ということ絶対言わないことに感心した。
 - ・ そして、「イノベーションは今あるものより少しいいだけでは駄目で、尖ったものを出しなさい」や「失敗から新しいイノベーションは生まれる」という意味のあるアドバイスを本気でしていただいた。
 - ・ 参加者には将来医師になりたい生徒がいたのだが、「医師にはなるけれども単に医師になってはいけない。医療として新たなスタートアップが目指せるのかという考え方に変わった」と私に話してくれた。
 - ・ 私は、アントレプレナーシップというのは、地方に住んでいる子どもたちにこそ、そのマインドがすごく必要だと思っている。
 - ・ 地方に住んでいる子どもたちも、どこに住んでいようが、アイデアさえあれば、国を変えることができるし、世界を変えることができると思う。
 - ・ どうしても東京にいないといけないということが違うという気づきをこの経験で得たのではないかと思っている。
- ・ 続いて、最後に入試などから見えてくる求められる英語力についてである。
- ・ 私は、このような授業を約 40 年前から実施してきたが、保護者の方からは、入試は大丈夫かという声が聞こえ、その都度、私は「私の英語の授業は本物です」と答えてきた。
 - ・ このような授業こそが、入試にも合致する時代にやっとなった。
 - ・ このスライドは、2023 年度の全国学力学習調査問題の英語の問題である。
 - ・ ①は、書くことの問題で正答率が 20.1%だったもので、ロボットが買い物ガイドやレストランで配膳を担っていることに対する自分の考えを述べるものである。

- ・ 誤答や無答の子どもたちのアンケート結果によると、「自分の考えは思い浮かんでも、理由を書くことができなかった」ということであった。
- ・ ②は、初めて話すことの問題が出題され、海洋にビニール袋が浮遊している現状について留学生のプレゼンテーションに対する自分の考えを述べるものである。
- ・ こちらは、正答率が4.2%で、誤答や無答の子どもたちのアンケート結果によると、「自分の話す内容が思い浮かばなかった」が35.8%、「自分の話す内容は思い浮かんだが、それを表現する英語が思い浮かばなかった」が41.1%ということであった。
- ・ このことから、大きな問題が2つ分かるが、まず、自分の頭で考えて、自分の意見を持つことに対しても難しさを抱えていること、そして、さらにそれを英語で表現する英語の運用力のなさが見えてくる。
- ・ 大学入学共通テストも随分変わり、現在、文法・発音問題は、全く出題されない。
- ・ また、出題される総語数が大幅アップとなり、2020年が最後のセンター試験と比べると2022年は、1.4倍の語数になっている。
- ・ つまり、リーディングコミュニケーション、読んでしっかり内容を把握するが問われている。
- ・ リスニングについても、読み上げ回数は1回になっており、聞き逃したらもう1回聞くことが今はできなくなっている。
- ・ また、英語の素材文の形式化が多様化しており、図・表・グラフ・イラストが混在していることから、文字だけではなくて、いわゆるマルチメディアをいろいろな形で英語を理解していく力が必要になっている。
- ・ つまり、今さいたま市が実施している英語教育、また、いわき市が実施している英語教育こそ通用する時代になっているといえる。

(2) ディスカッション

【市長】

- ・ 細田先生のこれまでの取り組み聞いて、行政実務と学校経営とを考えたとき、アイデアだけではなく実際に様々なチャレンジをなさっており、すごいパワーを感じた。
- ・ また、それだけ人を動かしたかは何なのかなと思って聞いていたが、細田先生の話術と、周りの指導主事とか教員が動いている姿に感心するとともに、私自身も非常に勉強になった。
- ・ 総合教育会議は首長と教育委員の意見交換がメインだが、今回、傍聴者の方々より事前質問をいただいております、そちらも回答させていただきながら意見交換を進めていきたい。
- ・ また、時間があれば会場の皆様からも質問・意見を伺いたい。

【宮澤委員】

- ・ まず一点目は、家庭への働きかけについてである。
- ・ さいたま市は一つの目標にチームで向かっていった印象があるが、いわき市は、人づくり日本一のまちにしたいと取り組んでいるものの子どもたちをどう育て上げていきたいかというのを家庭・学校・地域が明確でないと感じた。
- ・ さいたま市が 2013 年から取組みを開始し、小学生であった子どもは高校生になっており、社会経験や機会に恵まれて自分たちが走っていくグローバルな人間に育っていると思うが、どのように家庭などの理解を得られたのか？
- ・ 二点目については、授業時間についてである。
- ・ さいたま市のホームページを見ると、英語の時間数が多いと思ったが、英語以外の他教科についても、メソッドがあるのか？
- ・ 教科ごとに何か特色あるものを両立しながらこの英語教育を実施しているのか？
- ・ 三点目については、予算についてである。
- ・ さいたま市は、これだけの豊かな教育と質、直接雇用により人も多く動いているが、予算の規模はどのようになっているのか？
- ・ いわき市は、英検の準会場がなくなり、会場に親が送迎している現状であり、また、家庭の事情や、子どもたちが英検を受けたいという気持ちも異なる。
- ・ 教育行政として、学ぶ機会をどのように設けたてあげたらよいのかと思っているが、GTECや英検IBMの試験費用をさいたま市が全額負担しているのか？

細田氏

- ・ 一点目の家庭の理解については、私が6年間の教育長在任中に、保護者の皆様へのお話は、多分50回以上であったと思う。
- ・ 教員は、どうしても学校教育でいろいろなことが担える、何もかも背負うと思っているが、私は自分が所属している兵庫教育大学で調べたところ、学校教育ができることは本当にわずかで限られており、保護者の方、ご家庭のご協力なくてはできない。いかに社会と家庭を巻き込んでいくかがということが私のテーマでもあり、いまだにお声がかかって保護者の方々のところにお話しに行っている。
- ・ 同じ目線になって、同じマインドセットになるところまで皆さん方とコミュニケーションをとることが大事である。

- また、行政も同じで、私の教育長室は、「壁打ちの部屋」や「ブレスト部屋」と言われていたが、私のアイディアを役職関係なく、その分野の担当者みんなに参加してもらって、意見を言い合い議論する文化をつくった。
 - このことにより、みんなが自分事になっていったということが一つすごく大きいと思う。
 - 私がいなくなろうが、部長がいなくなろうが、そういうことが起こったとしても、みんなで議論するという風土ができたことは大きいと思う。
-
- 二点目の授業時間については、国語、算数などの授業時間を減らして、「グローバルスタディ」の時間を設けているわけではない。
 - 私が目をつけたのは、総合的な学習の時間の4フィールドのうち、「国際理解」がその一つのフィールドであったことから、英語という教科ではなく「グローバルスタディ」というオリジナルの教科で、国際理解を英語で実施している。
 - 私は、「英語は世界を見る窓」というのが自分のモットーで、私が英語教員であったから、英語を突出させようと思ったわけではない。
 - 教育長に就任して、全体を俯瞰して見たところ、全国学力調査はトップグループであり、一番伸び代があるのは、英語だと感じた。
 - これは、私の動物的な勘で、「お餅方式」と自分では呼んでいるが、何か一つすごいものがあると、お餅のように引っ張ることができると思っていることから、グローバルスタディに取り組んで、2年目に英語日本一になった。
 - その後、みんながそのそれぞれの教科で自分たちのプライドをかけてメソッドをつくる動きになってきた。
 - この動きを受け、「あなたがいなくなってもできるようにしよう」、「属人化をしないようにする」ということを伝えてきた。
 - 三点目の予算については、財政サイドとよく協議を行った。
 - 財政サイドと教育委員会の職員とが協議をするなかで、協議状況によっては、私が担当職員と連携して参加した。
 - また、特別職ということもあり、事業概要について、市長に対し直接説明のうえお願いをしてきた。
 - GTECや英検IBMの試験費用は、さいたま市が全額負担している。
 - 実は、さいたま市は合併後も毎年1万人ずつ人口が増えており、136万人にも手が届くところである。
 - どのように人口が増えたかを分析すると、0歳から14歳までの転入超過が9年連続日本一であり、さいたま市で子どもを育てたい、さいたま市で教育を受けさせたいというように思ってくれる方々が増えてきている

ことが、教育への予算を計上してもらえる大きな要因であったと感じている。

【市長】

- ・ 時間の都合から、委員の皆様からの質問・意見をまずお聞きして、細田先生にまとめてお答えいただきたい。

【根本委員】

- ・ 私も他の教科にどのような波及があるのかと思っていた。
- ・ いわき市内の学校を訪問して感じることは、私はALTの皆さんのお力はやはり大きいと思っている。
- ・ そのなかには、英語で授業を全部実施しているところもあるが、一部を実施しているところも多くある。
- ・ さいたま市の場合には、小学校の全教員に研修したということだが、ALTと日本人の先生の役割分担や打合せは行っているのかを学ぶことができれば、いわき市においても授業に深みが出ると思うことから教えていただきたい。

【阿部委員】

- ・ 私も高校教員で、現役の再任用で国語を教えている。
- ・ 県の高校教育課長の後、磐城高校の校長を務め、現在、いわき光洋高校で、再任用5年目である。
- ・ 私も同じようにパワーを持って進めていきたかったが、現場の子どもたちに残したいのは何かという課題を持って、「飛ぶ勇氣」をどう持たせるかということ考えて、現在、授業を行っている。
- ・ その飛ばせ方というものを属人化しないというところが非常に難しいところで、その方法が他人に伝播するかどうかというところを、細田先生は何か工夫があって、例えば指導主事などに、どのようにお伝えしてきたのかということをお聞きしたい。

【小峰委員】

- ・ 質問としては出ているので、先生のお話を聞きしたい。

【教育長】

- ・ さいたま市の取組みは見させていただいており、やはりすごいレベルが高いと思った。
- ・ 現在、いわき市でも、まずデータ分析から入って、ようやく学校ごとの状況が見え出した段階である。

- ・ まさに、細田先生が説明したように、まず状況を把握することが大事で、そこからようやく次の段階にいけるということで、我々もようやくその段階に入れたと思っている。
- ・ 今年度から、英語も含め、いかに授業のやり方に教育委員会でコミットできるかというのをねらって現場に足を運ぶようなスタイルで、学校を引き上げようとしているが、細田先生の資料の中にも、子どもがどう授業を感じているか、授業が楽しいか、わかりやすいかか、頭を使うようになっているかというような観点のデータをすごく重視をされていたことから、そこは今のいわき市が取り組もうとしている観点と一緒に方向性が合っていることが確認できたので、安心した。
- ・ 今後は、これの頻度や深みの部分について、やはり今いわき市でやっている取り組みも英語に関してはやはり単発型だったり、一部の子どもだけであったり、ちょっと範囲と量、回数がまだちょっと貧弱な状況であることから、それを高めていきたいと思った。
- ・ ただ、今やっていることにプラスアルファで新しいことやろうと思っても、なかなかそこは時間や物量、コストがかかることから、細田先生のお話を聞いて、今やっていることの置き換えるような、あるいは今やっていることのやり方を変えるだけで、全員をカバーできるような取り組みができないかということを感じ、そこは我々が学ぶべき取り組むべきところと思った。

【市長】

- ・ さいたま市の最先端のやり方を見ると、我々もそこまで目指して頑張ろうかと思うのだが、データ分析すらできていなかった部分もあったので、その辺りのエビデンスが段々進んできて、次の段階の授業づくりという状況になっている。
- ・ お話を聞きながら、さいたま市を目指すにはすごく高いところにあると思うのだが、一步一步進んでいきたいということを改めて私も感じたところである。
- ・ 今ほど、教育長及び委員から質問があったが、それらを踏まえてお話しただけか？

細田氏

- ・ まず、最初にいわき市の英語教育の現状や取り組みについてお話をいただいたとおり、さいたま市との方向性は同じであると感じている。
- ・ 私たちが考えてきたことや実践してきたことを同じように考えてチャレンジしていると思った。
- ・ その中でも、さいたま市が実施してこなかったことがあり、すごいと感じていることは、「英語教育サポーター派遣」という英語が堪能な市民の

方々のお力を借りていることは、いわき市ならではの取組みであり、私自身も勉強になった。

- ・ また、私はデジタル教科書、初等中等教育段階における生成A I の利活用の検討会のメンバーになっており、今日は午前中、会議に参加してきた。
- ・ 先ほど、生成A I を活用した授業の動画を見させていただいたが、次の学習指導要領に向かって、A I をどのように授業の中で効率的に使いながら、効率化とそれから効率的な授業のありように迫っていくかということが、いわき市ではもうすでにスタートしており、他自治体と比べると相当な強みだと思う。
- ・ A L T と日本人の教員の役割分担については、法制度上は免許を有していないためにアシスタントという立場ではあるが、私自身の長い英語教師としての役割としても、ネイティブとどこまでコラボレーションできるか、ネイティブとどこまで授業を一緒にデザインするかが一番大事だと思っている。
- ・ このため、教育長としてさいたま市の授業を見たときに、A L T をアシスタントに使っている教員が多くて、ネイティブと一緒に授業をデザインしていかなければならないこと、そのためにしっかり打ち合わせをすることを伝えてきた。
- ・ 次に、属人化させない方法については、先生が異動することにより、今まで実施してきたことが継承されないことで生じる児童・生徒への不利益を何とかしていくべきと思い、行政サイドの見方でシステムづくりを行った。
- ・ しかし、ベースになるテキストや研修の先の授業のオリジナリティは、これこそ教師の醍醐味であるため、その部分を否定しているということではない。
- ・ とにかく他人に伝播するということではなくて、仕組みをつくっていいこうという姿勢であったということである。
- ・ また、市長・教育長も言っていたようにデータベースを活用した授業、もしくはその行政のやり方がこれから絶対必要だと思っている。

【市長】

- ・ お話を聞いて、勇気をいただいた。
- ・ せっかくの機会であることから、傍聴に来られた方で質問はあるか？

【傍聴者（小野潤三市議）】

- ・ 前向きのこのような取り組みの一方で、学校現場では負の問題も抱えていると思うが、例えば先生方の多忙化、モンスターペアレンツやいろいろ

厳しい発達的な問題などがたくさんある中で、ある程度前進している力と、問題に対する対処の両方にどのように対処しているのか？

- ・ 模擬国連については、とてもいい取り組みだと思うが、イベントはやはり負担にもなる。
- ・ 各学校から選抜された子ども達がやっているのか、規模感、開催頻度などの負担感を教えていただきたい。

細田氏

- ・ さいたま市には、児童・生徒が 10 万 5000 人、教師が 7000 人近くいて、10 万 5000 人の児童・生徒の向こうには 2 倍に近い大人たちがいる。
- ・ この人数からみても、いわき市とは比にならないぐらいの問題や課題がすごくある。
- ・ 私が教育長を務めていたときは、毎週月曜日の朝に、前週にあったさいたま市立学校で起こったことを幹部とミーティングし、全部共有していた。
- ・ もちろん、すぐ対処しなければならない大きなことは即時に話があるが、そこまでのレベルでもない課題はたくさんあり、負の問題の宝庫である。
- ・ 教育という営みの中で、避けて通れない思春期のホルモンバランスによるものも多くあり、そのような負の問題が山のようにあるが、「大変だけど、命まで取られるわけじゃないから前を向こう」と言って、みんなを教育長室から送り出すことを心掛けてきた。
- ・ 前向きなマインドをみんなが持てるかどうか、このところに、前を向いてチャレンジできるかが掛かっていると思う。
- ・ どの自治体でも、問題は抱えていると思うが、それはそれとして決して目はそらさないけれども、どこまで前向きにチャレンジできるかが重要になる。
- ・ 目の前にいる子どもたちは 22 世紀を生きていくことから、未来をつかっていく人たちのために、私たちは何ができるかということを、そこに注力をするマインドを作っていくことが教育長の役割だと思っていた。
- ・ 二点目のイベントについては、やはり大きなイベントを実施するときは、負担もかかる。
- ・ しかし、主担当になる指導主事等が意気を感じてやれるかどうか、負担の向こうにある喜びを想像しながら頑張れるかどうかということが大きいと思う。
- ・ 「チャレンジすることに対して自分がワクワクするかどうか、ワクワクしなかったらやめよう」と言ってきた。

- ・ 模擬国連については、手挙げ方式で、これまで4回実施してきましたが、先ほどのスライドの第1回の人数よりもおおよそ4倍ぐらいに増えている。
- ・ 学校で代表者を選抜するよりも、手挙げ方式ということが大事になる。
- ・ やりたい、面白いと思って手を挙げてくる子どもたちをメインに実施している。

【市長】

- ・ 模擬国連については、国連の中で唯一、人材育成と研修事業に特化した機関である「国連訓練調査研究所（ユニタール）」が世界34か所に設置されているが、日本で初めてとなる「国連ユニタール CIPAL ジャパン国際研修センター」が本市に開設となる。
- ・ 教育と絡めたプログラムを実施していきたいと考えていることから、ぜひ模擬国連のような取り組みを、実際の本場のニューヨークの国連本部とつないで実施できたら最高だと感じた。

細田氏

- ・ 模擬国連については、大阪大学大学院の星野俊也教授に連絡し実現した。
- ・ 星野教授は、模擬国連を日本の大学生の活動として根付かせた方である。
- ・ いわき市で実施する場合には協力するので、お声がけいただきたい。

【市長】

- ・ 傍聴者より事前質問をいただいている。
- ・ これまでの説明でお答えいただいたものもあるが、英語教育の円滑な小中連携、接続にはどのような取り組みが必要でしょうか？
- ・ また、英語学習におけるタブレットの効果的な付き合い方を教えていただきたい。

細田氏

- ・ 先ほど説明したように、さいたま市は小学校と中学校の9年間を「4・3・2制」で捉えたカリキュラムを策定している。
- ・ 小学1年生から4年生までを第1期、小学5年生から中学1年生を第2期、中学2年生から3年生を第3期とし、連続性を重視したオリジナルのテキストや指導資料を用意しているため、小中連携なくてはカリキュラムが実施できない仕組みとなっている。

- ・ 英語学習におけるタブレットの効果的な使い方については、英語教育とA I、デジタルは最も親和性が高いと思っている。
- ・ もし、GIGA 端末がうまく使えてないのであれば、まず英語にターゲット絞っていくことをお勧めする。

【市長】

- ・ 大変有意義な意見交換ができた。
- ・ ぜひ今日の様々な意見交換を参考に、英語教育を高いものに進めていきたいと思っている。
- ・ また、細田様には、今後とも、様々な形で教育についてアドバイスをいただければと思っている。

3 閉会

【署名】
